

災害時の駆け込み寺

大田市の日帰り温泉施設「市新田福祉総合センター」で、「ユートランド新田」の新田反町で、一時は結構な状態まで低下した湯量が回復し、施設職員ら関係者を驚かせている。ただ湯量の低下・回復原因も特定されていないため、市は「今後も注意深く湯量の推移を見守りたい」として、回復宣言はもう少し先になりそうだ。同施設は2000年12月にオープンした。豊富な湯量を誇り多い時には毎時4立方メートルをみ上げていたが、11年5月に湯量の減少が判明。最も少ない時には毎時0.05立方メートルまで低下した。湯量に急激な変動が繰り返されることになった。市は「湯量は一定しているが、この判断材料が乏しい」として、回復宣言はもう少し先になりそうだ。

仁叟寺 県初の避難所指定

高崎市は、災害時に建物を開放して受け入れる避難所として、同市吉井町神保の仁叟寺(渡辺啓司住職)を指定した。寺院が避難所に指定されるのは県内で初めて。寺院ならではの広い畳敷きのスペースが避難生活に適する環境だとして、寺と地元住民が市に提案していた。渡辺住職は「寺が社会的責任を果たすことにもつながる。他の寺院にも広がってほしい」と話している。

発電装置や備蓄 本堂で寝泊まり

仁叟寺には、本堂など計360坪(約1200平方メートル)の畳敷きの部屋があり、少なくとも500人は寝泊まりができる。避難対象は吉井町第13区の約300世帯と、2、12両区の一部の世帯。従来の避難所までの距離と比べ最大1キロ程度から約50メートルに短縮され、



寺の周辺に設置された指定避難所を示す看板

消火栓や検知器確認 上信越道トンネル合同講習



上信越道の山岳区間を抱える本県と長野県の消防機関がトンネル内の非常用設備を確認する講習が7日、両県をまたぐ上信越道下り線八風山トンネル(4.47キロ)で行われた。高崎市等広域消防局と、佐久広域連合消防本部から計約60人が参加し、消火栓の操作や消防車に水を送る給水栓の接続確認をした。講習で取り付いた講習者は、トンネル内の非常用設備を確認し、発生した際に実際に火を消すことができるようになる。

災害時の駆け込み寺

仁叟寺 県初の避難所指定

高崎市は、災害時に建物を開放して受け入れる避難所として、同市吉井町神保の仁叟寺(渡辺啓司住職)を指定した。寺院が避難所に指定されるのは県内で初めて。寺院ならではの広い畳敷きのスペースが避難生活に適する環境だとして、寺と地元住民が市に提案していた。渡辺住職は「寺が社会的責任を果たすことにもつながる。他の寺院にも広がってほしい」と話している。

発電装置や備蓄 本堂で寝泊まり

仁叟寺には、本堂など計360坪(約1200平方メートル)の畳敷きの部屋があり、少なくとも500人は寝泊まりができる。避難対象は吉井町第13区の約300世帯と、2、12両区の一部の世帯。従来の避難所までの距離と比べ最大1キロ程度から約50メートルに短縮され、

200 世帯超で避難所が近くなるという。

市は寺に災害用備蓄品セットを設置し、対象地区への周知を進めている。市防災安全課は「地域に密着し、畳敷きの環境がある寺を災害時に開放してもらえるのはありがたい」としている。

市が民間施設を指定避難所にするのは初めてで、県内の他市町村でも私立大学や、洪水時に限り避難所になる高層の商業施設など少数を除き、ほとんどが学校や公民館だ。高崎市は、申し出があれば今後も民間施設の指定を検討する。

東日本大震災後、被災地でボランティア活動を行ってきた寺は、体育館の冷たい床に段ボールや毛布を敷き詰めて過ごす避難者や、大勢の住民を受け入れて“駆け込み寺”となっていた被災地の寺院を目の当たりにし、「災害時に寺が果たせる役割があるのでは」と模索してきた。

13 区の関口孝雄区長(70)も「独居の高齢者が多い地区なので、身近な寺に逃げ込めるのは安心」と賛同し、地元住民らの署名を集めて市に提出、ことし 5 月に指定された。

寺は 9 月指定避難所を示す看板を寺の周辺 4 カ所に設置した。11 月には、防災設備の施工などを手掛ける「第一テクノ」(東京都品川区)が寄贈した非常用発電装置も完成し、停電時に敷地内で 17 時間分の電気が供給できるようになる。